



マイ スコープ

ヤマセミの棲む東山丘陵

長岡市 川崎 健

紙面をお借りして、私の好きな探鳥地・好きな鳥をスコープに入れて紹介しましょう。

私の住む長岡市から信濃川を挟んで東山丘陵と西山丘陵を望むことができます。東山一帯は低山が連なり、緑や溪流に恵まれた自然がまだ豊かに残っています。プロミナー（望遠鏡）とカメラを片手にこの山道に分け入り、四季折々様々な野鳥達との出会いを楽しんできました。中でも、ヤマセミがお気に入りです。

ある年の6月30日、150メートル程の距離からヤマセミ3羽を発見しました。警戒心の強い鳥です。なかなか私のレンズの射程距離に届かず、接近できる機会を待ちました。10日も通ったでしょうか、やっと近くの枯れ木に留まる姿を捉え、ついに念願の写真に収めることができました。時々見かけている鳥ですが、いつもシャッターチャンスを逃していました。今回は枯れ木に留まり、青い空をバックにした撮影が叶い、同行者にも喜んでもらいました。案内した甲斐があったというものです。ケラッ・ケラッという独特の鳴き声を聞くのを楽しみに、時間帯を変えながら出会いのチャンスを探します。ある朝は、5羽を同時に観察したこともあり、その時は70歳を前にした私の探鳥歴の中で最大の喜びと密かに思ったものでした。この醍醐味は、プロミナーだけでなくカメラを持ち歩いて初めて味

わえるものだと思います。この場所は大事な場所としていつまでも残っていてほしいと願わずにはられません。ヤマセミはカワセミのような艶やかさはないものの、鹿の子斑は何ともシックな装いです。ピントを合わせる事に細心の注意を払い、7月には何度も通いつめて独り立ちの様子をカメラに収めました。良い写真が撮れたら、いつか展覧会にでも応募したいと願っています。



信濃川堤防草地における繁殖期の ホオアカの生息個体数について

南蒲原郡栄町 渡 辺 央

はじめに

ホオアカの繁殖期における分布は、北海道、東北など中部地方以北では山地から平地まで普通に分布しているが、中部地方以南では主に高地草原で繁殖している。新潟県では妙高高原（千葉 1975）や尾瀬ヶ原などの高地での繁殖が知られていたが、同時に信濃川や阿賀野川などの河川敷や堤防の草地でも繁殖していることがわかってきた。（渡辺 1972；渡部 1977）。しかも信濃川大河津分水では数つがいの繁殖が確認されるなど、それまであまり注目されなかった河川流域が本県のホオアカの繁殖地として重要な位置を占め、かつそこでの繁殖個体数も多いのではないかと思われた。そこで、1978年の繁殖期に多くの人達の協力を得て佐渡の国府川を含めた県内15河川流域においてホオアカの繁殖分布調査を実施した。その結果、主に囀り中の雄が阿賀野川では66羽、信濃川では63羽など10河川で合計181羽が確認され、県内の河川流域がホオアカの繁殖場所として重要な環境であることが明らかになった。（渡辺・千葉 1979）。その後、河川流域における調査は行われていなかったが、2000年の繁殖期に長岡市信濃川において繁殖鳥類の調査を行ったところ、コヨシキリと並んでホオアカの生息個体数が予想以上に減少している結果を得た。また、毎年長岡で行われる信濃川探鳥会などの結果をみても、1978年当時に比較して信濃川のホオアカの生息数が少なくなっていることがわかった。そこで2003年の繁殖期に1978年の調査方法に従って信濃川流域のホオアカの生息個体数を調査してみた。

調査地と調査方法

調査地域は1978年の信濃川調査の時と同様に、上流の小千谷市旭橋から大河津分水を経

て新信濃川（信濃川分水路）の渡部橋までの約40kmである。この区間をそれぞれ主な橋を起点に6区間（表1）に分け、それぞれ左右兩岸を調査した。5月下旬から6月上旬に行い、堤防場を車で時速5 kmほどで走行しながら主に雄のさえずりを認知し、双眼鏡で姿を確認した。確認時にはソングポストや周囲の植生なども合わせて記録した。

結果と考察

調査地において確認されたさえずり雄の総個体数は10羽であった（表1）。1978年の調査では同地域で63羽が記録されていることからみれば激減といってもよい個体数である。生息数の減少は各地区とも共通しており、1978年の時よりも増加している区域はなかった。特に、1978年に比較して生息数の減少が著しいのは、与板橋から長岡の蔵王橋にかけての右岸区域（約9 km）と長生橋から越路橋までの右岸区域（約6 km）、そして越路橋から小千谷市の旭橋までの左岸区域（約10 km）である（図1）。この3区域はいずれも1978年の調査では10羽以上の個体が確認された地域であったが、今回の調査では前2区域については生息が確認されなかったし、1978年の時には16羽の生息が確認された越路橋から旭橋までの左岸区域でもわずか4羽を確認したに過ぎなかった。このように信濃川堤防を中心にした草地ではこの25年間にホオアカの生息数は大幅に減少していることが明らかになった。

ホオアカの生息数が信濃川流域で少なくなった原因については、これほどの減少を引き起こす環境変化があったようには見えない。ただ、区域によってはホオアカの繁殖に影響があるだろうと考えられる要因としては、堤防の改修、植生の変化、堤防道路の整備と交通量の増加、堤防の草刈りなどがある。なか

表 1. 信濃川堤防草地におけるホオアカの生息調査と確認個体数

調査区域	調査年月日	区間の距離	確認個体数 (1978年の記録)	
渡部橋～大河津橋 (左岸)	2003.5/30	5.6	2	(5)
〃 (右岸)	5/30		0	(1)
大河津橋～与板橋 (左岸)	5/30	5.0	0	(1)
〃 (右岸)	6/13		0	(2)
与板橋～蔵王橋 (左岸)	6/13	9.0	2	(3)
〃 (右岸)	5/27		0	(12)
蔵王橋～長生橋 (左岸)	5/29	4.0	1	(4)
〃 (右岸)	5/27		0	(0)
長生橋～越路橋 (左岸)	5/29	6.0	1	(3)
〃 (右岸)	6/ 6		0	(10)
越路橋～旭 橋 (左岸)	6/ 6	10.0	4	(16)
〃 (右岸)	6/ 6		0	(6)
合 計		39.6	10	(63)

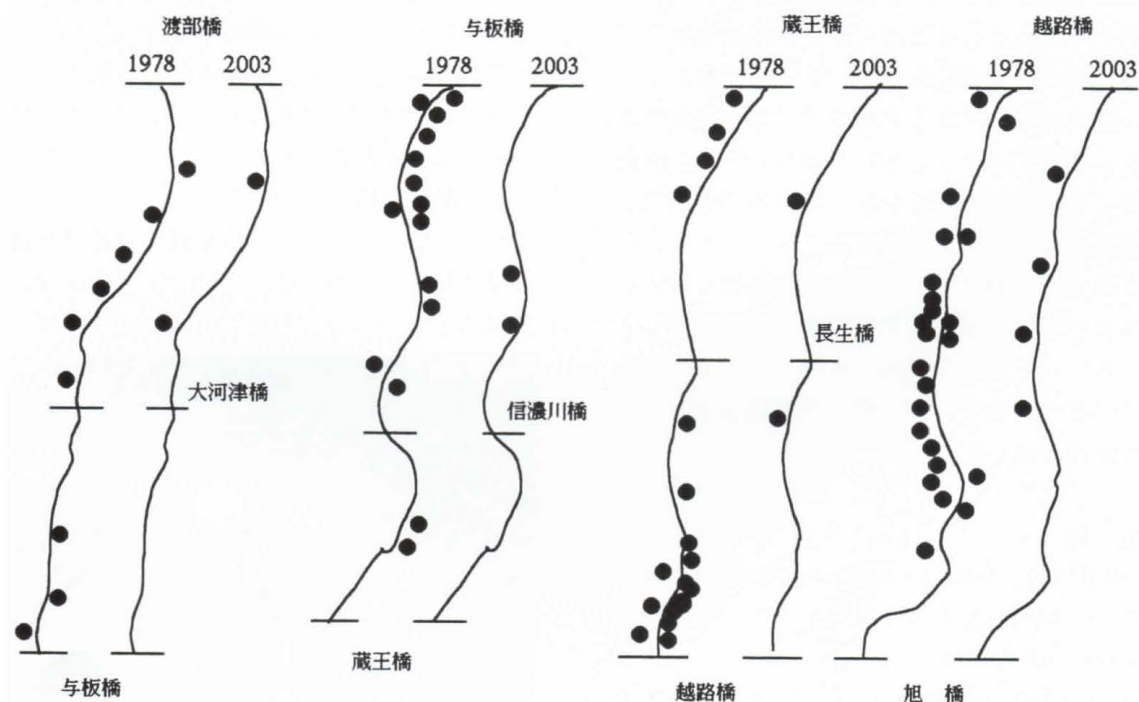


図 1. 信濃川本流・分水路におけるホオアカの生息分布地点の変化

でも直接影響が懸念されるのは河川管理者によって毎年行われる堤防の全面的な草刈りである。この草刈りは1978年当時も行われていたが、今より実施時期が遅かったように思われる。現在は6月中旬頃に行われており、ホオアカの営巣がこれら草地で行われているとすればその影響は大きいと思われる。今回信濃川の調査と合わせて、堤防の草刈りが行われていない支流洩海川を7月1日に調査したところ11羽を確認した。1978年の調査時にはここで20羽が確認されていることから信濃川同様減少してはいたが、それほど顕著ではなかった。そして今回の信濃川調査でさえずり雄を確認した場所（主にソングポストと思われる）をみると、ほとんどが堤防下の河川敷にある杭や高茎草、樹木などを利用しており、1978年の調査時に確認個体の61%が利用していた堤防上の協会杭やイタドリなどでの確認がほとんどなかった。ホオアカが堤防草地から離れているような感じを受けた。また、越路橋から旭橋間左岸のように堤防に近い河川敷のオニグルミやハリジュ等の樹木が生長し、樹木になっている区域もホオアカの生息を交替させていると思われた。そしてこのような区域ではホオアカよりもホオジロの生息数が多くなっていることもわかった。一方、調査中に堤防や河川敷ではなく堤内地の水田や用水畔に沿ったわずかな草地でさえずるホオアカ雄を2羽確認した。また近年増加している休耕田や放棄水田などでホオアカが繁殖しているという観察もある。本種が堤防草地からそのような場所へと生息地を移動させている可能性も高い。

文 献

- 千葉晃（1975）妙高高原の鳥類。長岡科博研報10:37～51。
渡辺央・千葉晃（1979）新潟県におけるホオアカの繁殖期の分布—長岡科博研報14:13～22。
渡辺央（1972）繁殖場所を追われる大河津のホオアカ。野鳥新潟21:5。
渡部通（1977）阿賀野川流域におけるホオアカ（予報）。新潟県野生鳥獣生態研究会報3:7。

支部総会 探鳥会に参加して

中頸城郡柿崎町 小池 秀 則

6月1日 4時起床。小雨の中を数台の車に分乗して出発。歩き始めてすぐオオルリのさえずりに出会う。高く速い展開のさえずりは、聞きなす事がむずかしい。私の双眼鏡では、よくわからなかったが、フィールドスコープでとらえられた像を見せてもらい、腹の白と背の青を見ることができた。

車道をエコミュージアム入り口に向けて進むと、今度はクロツグミがさえずっていた。このさえずりも、とても複雑でカタカナで書き表すことはできない。音楽的なきれいな節回しである。絶対音感のある人なら、楽譜に落として再現できるのであろうが。

前日、高田から十日町経由で浅草山荘にまで、運転しながらずっと野鳥のさえずりのテープを回してきた。いくつかの鳥の名前とさえずりは覚えたつもりでいた。クロツグミは名前は頭に入っていたが、そのさえずりはついに覚えられなかったものの一つだ。

「ホイ→チョ→チョ」やっと私にも聞き覚えのある声が聞こえてきた。クロジである。でも今度は、その姿がイメージできない。大きさは、どんな色なのか、嘴の形は、全く浮かばない。車の中ではテープを聞くだけで図鑑を開けなかったからだ。



エコミュージアムの建物の屋根にキセキレイが見え隠れする。散策道に入っていくと、ウグイス、ヒヨドリ、ホオジロと聞き覚えのあるさえずりにほっとする。ノジコにキビタキがさえずっているというが、さっぱり分からない。雨がぱらつく。傘をさすと傘に当たる雨の音が気になる。雨具だけで耐える。沢に入っていくと、アカショウビンの憂いを含んださえずりが聞こえてきた。この声は一度聞いたら忘れられない。姿形も図鑑を一度見ただけで印象に残る。私はまだ、図鑑でしか見たことがない。つづいて「お菊二十四ー」のイカル。これは、時々我が家の近くの樺の木に来るので知っていた。

宿舎に帰り、玄関前で「鳥合わせ」。なんと30種類以上が確認されたという。私の野帳には、その半分も記録がない。

探鳥会へは、参加したいと思いながら、長い間実現することができないでいた。日本野鳥の会の会員歴は10数年になるのに、フィールドに出たのは冬の朝日池1回だけ。今年度仕事の区切りがつき、新しい分野に飛び込む決心をした。

野草の会では、名前の分からない植物が出てくると、周りの人にすぐに尋ねることがでる。でも、探鳥会では、みなさん耳を澄ませて黙っておられる（声を立てたら、さえずりは聞こえないし、鳥が逃げてしまうので当然なのだが）のでなかなか声を出しにくく、結局今のは何だったか分からずじまいになってしまう。でもこれが探鳥会なのだとも感じた。初心者には、入りづらい雰囲気だが、これから数年がんばって何とかものにしたいと思う。



山本山探鳥会に参加して

北魚沼郡小出町 桑原和寿

9月23日に山本山の山頂展望台での中越地区の探鳥会に家族4人で参加させていただきました。一日を通して天気の良い日が珍しい今年の秋に探鳥会のある祝日が晴れるという大変な幸運に恵まれました。

晴れる日の少なかった寒い夏や秋の台風など、渡りの主役達には幸いの年だったのではないのでしょうか。

9時に到着し展望台へ階段を上がりながら見上げるとすでに多くの皆さんが、しかも同じ方向を見つめている様子でした。慌てて登って視線の方向を向くと眼下から上空まで続くタカ柱、同じ螺旋階段を昇るようにドンドン高度を稼いでいく姿が見えました。

さすがに渡りを見るなら山本山と聞いてきたように、11時過ぎまでハチクマ、ツミ、サシバ、ノスリ、チョウゲンボウの5種類計約160羽が南へ渡ってゆく姿を観察することが出来ました。

短時間で多くのワシ・タカを見られるチャンスに種の特徴を一生懸命記憶に焼き付けようと頑張ってみました。基本的には姿がよく似ているというのが自信を持って記憶できたこととなりました。

そのような中で大きな三脚に望遠レンズを乗せている方がいて、野鳥写真家の叶内拓哉さんと教えてもらいました。ツミとハイタカの識別や秋の渡りなどについての解説を聞か



せていただくことが出来ました。その豊かな経験や広い知識もすごいものだと感心しましたが、鳥を見つける・識別するという技の鋭さにはただならぬものを感じました。回りの人のたちと話していながらも「あそこから上がってきている」と私達が真剣に双眼鏡で探してもすぐにはわからない鳥をいとも簡単に見つけてしまうし、ようやく黒い点から鳥の形に見え始めたころには「ツミ幼鳥」とさりと識別されていました。

持っていたカモハンドブックが叶内さんの著書と後でわかった家族がサインをもらえばよかったと残念がっていました。

9月に入って少なかった晴天を渡る鳥達と見たい私達の両者が満喫できた一日になったと思います。

元気でまた来年戻ってきてと南の空に小さくなっていった鳥達にエールを送って秋晴れの山道を下りました。

夏期に鳥屋野潟で観察されたカンムリカイツブリ幼鳥

西蒲原郡潟東村 岡田 成弘

はじめに

カンムリカイツブリは冬鳥としてシベリア方面から越冬のため日本各地の湖沼や河口、内湾に渡来する。少数は国内でも繁殖し、1972年に青森県で確認されて以来、大阪府（淀川水系）、滋賀県（琵琶湖）、三重県、などで巣立ちヒナが観察されている。新潟県内の湖沼や内湾に広く渡来し越冬するが、これまでヒナや繁殖が確認された報告はみられない。筆者は2000年と2003年の夏期にはカンムリカイツブリの幼鳥を確認したので報告する。

観察場所及び方法

新潟市鳥屋野潟西側にある鳥屋野潟公園（鐘木地区）から鳥屋野上沼地区（写真1）を主

に観察、原則として毎週金曜日早朝に調査を行なった。

観察状況

（2001年）

7月～8月 本種夏羽の一羽の越冬を確認。

（2002年）

5月24日から7月18日まで 鳥屋野潟公園東側の運河と湖面が合流する地点から湖面にかけて成鳥夏羽1羽を確認。

7月27日 鳥屋野潟上沼側に茂るコウホネの中を泳いでいるカンムリカイツブリ幼鳥2羽を確認。2羽は成鳥大で、遠くから観察すると冬羽のような灰色に見えるが、詳細に観察すると綿毛が残り、首に縦じまが明瞭に認められた。幼鳥2羽夏羽の成鳥からやや離れていた。

8月3日 上沼方面から湖沼中央自然科学館付近まで成鳥のあとについて泳ぐ幼鳥2羽を確認。顔に縦縞模様が残る。

8月31日 上沼側の水面に茂るコウホネの中を泳いでいるカンムリカイツブリ幼鳥1羽を確認。同日、別の場所で夏羽成鳥について泳ぐかなり小形の幼鳥1羽を確認。

（2003年）

7月16日 上沼側の水面に茂るコウホネの



写真1 鳥屋野潟公園の概要（上沼方面）



写真2 2003年7月17日
上沼ヨシ原水路で確認した幼鳥

中を泳いでいるカンムリカイツブリ幼鳥1羽を確認。

7月17日早朝 上沼側親松排水機場工事現場付近のヨシ原水路で縦縞模様の残る幼鳥1羽を確認(写真2)。

7月17日午後 鐘木地区の運河(産業振興センター脇)のヨシ原付近で幼鳥3羽を確認(写真3)。水路中央部で潜水採餌を行なう。また、ヨシが茂る湖岸で足をばたつかせて潜り、頻繁に小魚(主にフナやタナゴ類)を捕食していた。運河と湖面が合流するところで成鳥1羽を確認。

まとめと考察

毎年6月下旬から7月中旬にかけて不在となるため観察ができず、幼鳥については7月

中旬以降の観察となった。また鳥屋野潟は湖水面積が広く、全域を調査することはできなかった。なお2002年8月11日にも成鳥について泳ぐかなり小さな幼鳥1羽を観察しているが、その後は確認できなかった。

巣や卵を発見していないものの、以上の観察結果から、鳥屋野潟でカンムリカイツブリが繁殖した可能性が濃厚である。

繁殖が行われた背景としてつぎの事が指摘できる。

① 国内で繁殖が報告されている青森県むつ小川原湖沼群や滋賀県琵琶湖などと鳥屋野潟の環境を比べてみると、湖水面が開けヨシ原が発達しているなどの類似点が多いこと。

② 鳥屋野潟にはコイ科の淡水魚が多く、餌となる水生動物が豊富である。

今後とも定期調査を続け繁殖の有無や生息状況について観察していきたい。

謝辞：貴重な情報を提供いただいた、佐潟水鳥湿地センター佐藤安男氏、水原町観光管理事務所佐藤巖氏、豊栄市ビュー福島潟の皆様にお礼を申し上げます。また、調査に協力いただいた本支部大林正人さんと大林尚子さんにもお礼を申し上げます。

文献：文一総合出版 バーダー2001年2月号「カイツブリってどんな鳥」



写真3 2003年7月17日 鳥屋野潟に注ぐ運河で魚を採餌する幼鳥

どくとるアルバトロス航海記

新潟市 高 辻 洋

海ゆかば

98年4月27日、私は釧路航路の大型フェリー「ブルーゼファー」の特等船室の客となりました。釧路航路は当時ブルーゼファーとサブリナという2隻のフェリーで運行されていて、深夜零時に東京港を出発して翌々日の早朝に釧路港に入港するという、31時間余りの航海でした。そのころ私は鳥の中では雁が一番好きだったのですが（雁は今でも好きですが）、海の鳥にもかなりの関心を持っていて、特にオオミズナギドリが細く長い翼でほとんど羽ばたかずに海面を低く弧を描いて飛ぶ姿に「カッコいいなあ」などとしびれていたものですから、この年に北海道を旅行する計画をたてたときに、海鳥の観察では抜群の人気を誇る釧路航路を往路に利用することにしました。

それにしてもこの航海ではよく鳥が出ま

した。夜が明けて房総沖あたりでしょうか、天気は生憎の曇り空だったのですが、暗い海に目を凝らしてみると、細長く黒っぽい翼の中型の鳥が幾つも波頭を薙ぐように飛んでいるのが見えます。たぶんオオミズナギドリやハシボソミズナギドリなどミズナギドリの仲間でしょう。右に左に弧を描きながら、洋上低く滑るように飛んでいます。明るくなるにつれてその数もだんだん増えてきて、船は次第に海鳥に囲まれて渡航するようになってきました。

壮観だったのは、船が操業中の中型漁船の近くを通過したときの夥しい数の海鳥の群れです。網からこぼれる魚を狙っているのか、あるいは付近の海面に小魚でも湧いているのか、とにかく数千とも数万ともつかぬミズナギドリの大群が漁船めがけて海面すれすれを疾駆し、舞い上がり、木の葉



のように波にもまれて操業している漁船を包み隠してしまうほどの大きな鳥山を作っていました。

特等船室には専用のデッキがあったため、私はそこへ椅子を持ち出して手すり越しに双眼鏡で眺めていましたが、地味な色合いのミズナギドリが短い羽ばたきと滑空を交互に海上を飛び交う様を眺めているとなんとも言えずいい気分になってきて、飽きずに海を眺めながら「船に野ってよかったなあ」という気持ちでいっぱいになりました。

こうしたミズナギドリの大群もさることながら、この航海での圧巻は何といってもコアホウドリの出現です。「ハシボソカハイイロかしっかり識別しよう」などと図鑑片手にミズナギドリを追っている双眼鏡の視野に、大きな鳥がゆっくりと入ってきました。とてつもなく大きな鳥です。上面はグレーと白のツートンカラー、下面は純白ですからウミネコと同じパターンですが、大きさはウミネコとは較べものになりません。俗なたとえですがタタミが飛んでいるような大きさと言った方が分かりやすいかもしれません。長い翼の先端をやや下向きにして、ほとんど羽ばたかずゆっくりと弧を描き、ときに風に乗って滑るように急降下したと思うと次の瞬間には向かい風を受けてふわっと反転したりと、まるでスローモーション映像を見るようにゆっくりと落ちていて波間を逍遥していました。このコアホウドリの出現は言葉にならないほど衝撃的で、事実このときのノートには「一瞬しんとなって身震いするような感銘あり」と記してあります。実際その存在感は群を抜いていて、群飛するミズナギドリに目をくれる風もなく悠然と飛ぶ姿に、ふと私は「長距離ランナーの孤独」という小説のタイトルを思い浮かべました。そしてしばらくは船と併行しながら次第に船首方向へと進み、やがては船を先導するように船の先を飛び

続ける姿を見て、私は思わず「コアホウよ、お前は立派だ」とつぶやいたのです。

翌々日の早朝、船は朝日を浴びて群れ飛ぶミズナギドリ、コアホウドリ、クロアシアホウドリなど、たくさんの海鳥の歓迎を受けて釧路港に入港しましたが、私はこの航海でほとんど海鳥の識別ができませんでした。ノートをみても「コアジサシのような銀色の鳥」とか「小型のシギ」とか「ウのように行列を作って飛ぶ大型の鳥の一団」とか「嘴のみオレンジ色の全身すすけた鳥」など、何とも冴えないことが書いてあります。確かに海鳥は地味で似たようなものが多いし、航行している船から飛んでいる鳥を識別するのは楽ではないのですが、それは言い訳であって、本当はやはり勉強不足、訓練不足、能力不足が原因であることはよく分かっていました。それだけにこの航海で出た鳥全部が識別できるようになれば船旅の楽しさは倍加するだろうし、ぜひそうになりたい、そのためにはもっともっと経験を積まなければと思いました。

それにしてもコアホウドリの印象があまりに強烈だったので、私はブルーゼファーのタラップを降りながら「よし、これから密かに“どくとるアルバトロス”を名乗っ



て、小遣いの続く限り船に乗ろう」と固く心に誓ったのでした。医者でもないのに“どくとる”と名乗るのは少し気が引けましたが、大好きな“どくとる”にあやからせてもらったのです。

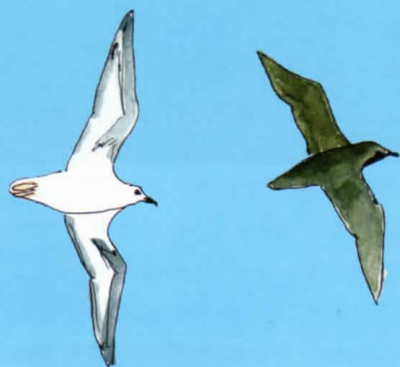
鳥海の舞う太平洋

釧路航路は東京港を出港すると伊豆大島付近まで南下し、そこでようやく転針して釧路港へ向かうのですが、それが時間がかかり過ぎると敬遠されてか、私が乗った翌々年に廃止されてしまいました。もう一度乗ってみたいと言う願いが叶わずに残念でしたが、これに代わる航路はないかと調べてみると、大洗から苫小牧と室蘭へ向かう航路と名古屋から仙台へ寄港して苫小牧へ向かう航路のあることが分かりました（室蘭航路は不況のせいか最近運休となっています）。大洗から苫小牧へは19時間余り、仙台から苫小牧へは14時間余りの航海です。いずれも本州の沿岸を航行するため、バーダーには釧路航路に較べて外洋の鳥が出にくいと言われていたようですが、背に腹は代えられないとばかりに乗ってみるとそんなことはありません。太平洋沿岸も釧路航路に勝とも劣らずに盛大に海鳥が舞っていました。私はこれまでに8回太平洋航路にりましたが、4月から5月にかけての時季であればまずはずれはありませんでした。海面を被いつくすほどのハシボソミズナギドリの大群や帯のように流れ飛ぶアカエリヒレアシシギの群れ、オオミズナギドリを襲うトウゾクカモメ、それに海の保安官よろしく洋上を巡回するコアホウドリとクロアシアホウドリの大きな群れなど、目を見張る光景に何度も遭遇しました。

もっとも印象に残っているのは、02年4月30日に苫小牧から大洗へ南下する便に乗ったときのこと、夜が明けてしばらくすると船の周りはせわしく飛び交うハシボソミ

ズナギドリでいっぱいになってきました。何か騒々しい感じがするので何事かと思って前方を見ると、船の進路は海面に降りて休んでいるハシボソミズナギドリで埋めつくされていて、船はちょうどそこへ割って入るように進んでいたのです。ですから船の舳先は波しぶきならぬ「鳥しぶき」をあげていたようなもので、船首の方から鳥が湧くように舞い上がり、あたりを飛び回っては船を避けて着水するということを繰り返していました。こうしたことが30分も続いていましたから、海上のハシボソミズナギドリの帯は20キロ近くに及んでいたはずで、その数は数万というよりは数十万といったほうがいいのではないかと思います。このときはアカエリヒレアシシギも大群を作っていて、やはり数万という数はいたでしょう、船が進むたびに朝日にキラキラと輝きながら100羽、200羽という群れで波間を飛んでいました。

7月の初めにも1回乗ったことがあります、やはり7月はシーズンも終わっていて、大きな群れに出会うということはありませんでした。ただ、このときの航海ではミズナギドリの識別で貴重な経験をしました。船は時速40キロくらいで航行していますし、鳥は船の後方へすっ飛んで行きますが、鳥が船と並んで飛んでくれれば、船からはちょうど止まっている鳥を見るようにじっくりと観察ができることになります。この航海で私は望遠鏡の視野の中に船と並んで飛ぶハシボソミズナギドリとハイイロミズナギドリを入れたのですが、進む方向が同じですから、私は望遠鏡を覗いているだけで2羽のミズナギドリの違いをよく観察することができました。2羽は5分くらい船と一緒に飛んでくれましたから、ハシボソは羽ばたきが早く、滑空にときどき羽ばたきを交える程度であることとか、ハイイロのほうが少し大きく、目を隈取りしたような厳



つい顔をしていることなど、なかなか識別の難しい両種ですが、その違いがよく分かりました。

この両種の識別のポイントに翼下面の色というのが合って、ハシボソは淡灰色から灰褐色に光るものまで変化があるがハイイロは銀灰色に光るとされています。ところが実際海の上ではどちらも灰色っぽいだけで見分けなどつかないことがほとんどなのですが、このとき船の周りのミズナギドリを見ていると、翼下面が明らかに銀灰色に光っているものが1羽見られました。このときは「なるほど、これがハイイロの翼下面か」と晴々とした気分で納得しました。

釧路航路以来何回か太平洋航路を航海し、ときどき図鑑などを讀んだりしていると少しは識別も上達するようで、釧路航路で分からなかった「小型のシギ」や「ウのように行列を作って飛ぶ大型の鳥の一群」も、同じものを太平洋で見て、それが実はアカエリヒレアシシギでありハシジロアビだったことが分かりました。

残念ながら私はまだ、そう珍しくはないはずのアカアシミズナギドリとフルマカモメをしっかりと見ていないので、ぜひともこれらもこんな調子で見分けたいものだと思っています。

秋の渡りのころはどうだろうかと、10月の初めに大洗と苫小牧の間を往復したことがあります、さすがにこの時季は見るべ

きものがありませんでした。ミズナギドリ類はオーストラリア近海をベースに1年かけて地球を時計回りに回るそうです。そうすると日本は10時半くらいの位置ですから、日本の秋には彼らはもう4時くらいの辺りを渡っているのでしょう。この時季には「ダメモト」覚悟で珍しい鳥を狙って船に乗ることになりそうです。

船に乗っていると渡り途中の小鳥が飛び込んでくるのがよくあります。私はこれまでにアオジ、メボソムシクイ、キセキレイ、オオルリ、ツグミ、キジバト、ハヤブサなどを見ているし、他にもハッキリと見分けられなかったものが幾つかあります。ハヤブサなどは海上へ狩りに出たものなのでしょうが、小鳥類にとって船はまさに「渡りに船」だったようで、みな相当疲れているようでした。メボソなどは甲板の隅にじっとうずくまっていたのをハンカチをかぶせて掴まえたのですが、手のひらにのせるとしばらくじっとしていましたが、お手玉をするように少し手を動かすと突然パッと飛び立っていきました。陸地も見えない夕暮れの海に向かって飛んで行く後ろ姿に、無事に目的地へ着けよと願わずにはいらませんでした。

オオルリは船と並んでたった1羽、小さく波打つように飛んでいました。こんなところにオオルリがと思ってよく見ると、必死の形相をして飛んでいます。普段溪谷の梢でのどこかに囀姿からは想像もできないような厳しい顔つきで、目をむくようにして飛んでいます。もののたとえではなく、ほんとうに切羽詰まった表情でした。私はこの時、鳥にも表情があるということが分かりました。襲われないように、落ちないように、常に死と隣り合わせで飛ばなければならぬのですから、必死のオオルリに「お前たちも大変だなあ」と声をかけたくない思いでした。

野鳥の貯食行動

新潟市 小池 重人

枝先にアマガエルがひからびているのをときどき見かける。これはモズのしわざだ。よく知られている「はやにえ」と呼ばれる習性である。ほかにも魚、昆虫、ネズミなどがはやにえにされる。この習性はモズがなわばりの境界を示すものだとも考えられているが、餌（えさ）が乏しくなった時期に食べることもあるので、貯蔵食料として役立っているのだろう。食料を貯蔵しておいて後で食べるというのは私たち人間にとってはあたり前だが、鳥には珍しい習性だ。ハヤブサの仲間のチョウゲンボウも獲物をすぐに食べないで貯えておく習性があるらしい。

ほかにも食料を貯蔵して後で食べる鳥がいる。ヤマガラが有名だ。ヤマガラはシイやエゴやブナの実を枝からとり、朽ち木などにとがったほうを先にして入れ、つついて押し込み、後でふたまでする。ありかを覚えていて、食料が少なくなるとすぐに掘り出して食べる。カケスはドングリが好きで秋にたくさん貯え、必要に応じ取り出して食べる。高山にすむホシガラスもハイマツの実を貯蔵して食べる。こういった一連の行動を貯食行動という。ほかにコガラ、ヒガラ、コジュウカラにもこの行動が観察されている。ヤマガラやホシガラでは貯蔵していた実を、翌年の繁殖期に巢内の雛（ひな）に与えることさえある。

かたい木の実には腐りにくいので貯蔵には向いている。しかし鳥によってはかたい殻を破らなければ食べることができない。ヤマガラ

はシイの実を食べるとき、細い横枝にとまり両足でおさえてかたい殻をつつき、穴をあけ中の実を食べる。そのため彼らの嘴（くちばし）や足は丈夫にできている。伊豆諸島・三宅島にすむヤマガラの亜種オーストンヤマガラは本州のものに比べ体が大きく嘴も足も丈夫である。これは冬の食料として本州のものより大きいシイの実を多食することから進化したと考えられている。

貯食行動をする鳥たちはすべてが一年中同じ場所にすむ留鳥である。厳しく餌の乏しい冬を乗りきる知恵が留鳥たちには備わっている。

参考文献

小池重人. 1992. バードウォッチング. 新潟日報夕刊



モズ

発行 2003年11月20日 No.56

発行人 大島 基 編集者 小林成光、末崎 朗、千葉 晃

日本野鳥の会新潟県支部

事務局 〒950-0941 新潟市女池3丁目13番25号

TEL 025-285-2405 本間由紀子方 〈振替口座〉00610-1-6002

この度発行した「日本野鳥の会 新潟県支部報 No.56」に多くの校正ミスがありました。執筆頂いた方々はじめ会員の皆様に多大のご迷惑をお掛けしましたことを衷心より深くお詫び申し上げます。この責任は全て編集者にございます。印刷し直しも考えましたが、ここに正誤表をお届けすることでお許しを願う次第です。今後このようなことが起きない様、万全の注意を払って編集を進めて参ります。

正誤表

P 1. 表題： ヤマセミの凄む→棲む

右段4行目： 鹿の子斑→斑

P 4. 左段18行目： 協会杭→境界杭

左段22行目： ハリジュ→ハリエンジュ

左段23行目： 樹木→樹林

左段23行目： 交替→後退

右段20行目： ホイーチヨチヨ→ホイーチヨチヨ

P 6. 右段14段目： 一羽の越を→一羽を

右段31行目： 夏羽成鳥に→夏羽成鳥の後に

P 8. 右段10行目： 渡航→航行

P 9. 左段9行目： 飽きず→飽かず

左段10行目： 船に野って→船に乗って

P 10. 左段4行目： “どくとる” → “どくとるマンボウ”

左段6行目： 鳥海の舞う→海鳥の舞う

左段27行目： 鳥は船の・・→鳥はく >船の・・、 < >つぎの1行を挿入。

<それよりもやや早いスピードで飛んでいますから、船と鳥が行き違うと鳥は>

右段38行目： 羽ばたきが早く、滑空に・・→早く< >滑空に・・、

< >につぎの1行を挿入。 <滑空の中に羽ばたきを頻繁に取り入れるが、

ハイイロは羽ばたきが少しゆっくりで、>

P 11. 左段5行目： というのが合って→あって

右段30行目： 普段→ふだん

右段31行目： でのどこかに→でのどこに

P 12. 左段24行目： コジュウカラ→ゴジュウカラ
